
「クラブ ファントム」

りん太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「クラブ ファントム」

【Nコード】

N0072F

【作者名】

りん太郎

【あらすじ】

超美人キャバ嬢「静^{しず}」と秘密主義の男「梅崎^{うめざき}」の仲良しコンビが、キャバクラ「クラブファントム」で起こる出来事や噂話に、お気楽？、時にはシリアス？？に迫る。一話完結の形式をとっているが、シリーズを通しての「静」と「梅崎」の恋の行方にも注目・・・

第一話 恋は盲目（前書き）

当小説はキャバクラを舞台としています。表現、描写には注意をしているつもりですが、差しさわりがあるとご判断された方はご遠慮ください。

第一話 恋は盲目

「クラブ ファントム」

第一話 恋は盲目

九月に入ったというのに蒸し暑い日が続いている。日が落ちても外に出ると汗ばむほどだ。

しかし、どこからともなく虫の音が聞こえたり、空気に透明感を感じたり、少しずつ少しずつ秋の気配が漂う。

都内某所。

夜の街も数年前に比べると、長引く不況のためか、街行く人波もまばらでどこか寂しげだ。

しかし、ここだけは以前のまま変わらない。

一步店内に入れば、今日もきらびやかな照明と華やいだ雰囲気の中で世の中の縮図を見せてくれる。

そう、ここは「クラブ ファントム」。

色と欲と見栄の世界。

ここでキャバクラについて少し説明しておこう。

キャバクラとは、一時間いくらかという決められたセット料金でお店に入る。

お店に入ると女の子が、基本的にマンツーマンで隣に座り、お酒やお話の相手をしてくれる。

通常は一時間で二、三人の女の子が廻ってくる。

気に入った女の子がいれば『指名』をすると、その女の子がデー

ブルについてくれる。

指名の無いお客さんを「フリー客」、指名のあるお客さんを「指名客」と呼ぶ。

また、指名には二種類あり、初めから指名の女の子が決まっており、入店時に指名を入れるのを「本指名」といい、店内に入ってから、気に入った女の子を見つけ指名することを「場内指名」という。この「本指名」の女の子をめぐって、女の子とお客さんと男子スツフが、悲喜こもごものドラマ、色と欲と見栄の世界を紡ぎあげていく。

「いらつしゃい。今日も一日お疲れ様。」

そこには真つ白でふんわりとした素材のロングドレスを身にまとった、とてもかわいくて、とても美しい女の子が微笑んでいた。

その微笑みは、いつもと変わらぬ完璧な微笑で、妖艶さとはかけ離れた、すがすがしい清涼感を伴う微笑み、かといって決して冷たい印象ではなく、とても暖かな、その人柄が表れるような微笑だ。

女の子の名前は「静^{しず}」。

切れ長で二重、黒目がちな大きな瞳。

鼻筋もすつきり通り、その切れ長がで意志の強そうな目元とあいまって勝気な印象を与える。

唇はいつもキラキラと輝いている。

どこからどう見ても二十歳過ぎにしか見えないが、年齢は二十八歳だ。

背はそれほど高くは無いけれど、ほっそりとしていてスタイルは抜群によい。

その身のこなしは子猫のようにしなやかで、優雅で落ち着いた大人の女性を若く活動的に見せている。

美しく長い髪の色は少し明るめのブラウンで、今日はクルクルと巻いている。

静は五年前にこのお店「クラブ ファントム」で働き始めた。今までに色々な職業を経験し、人並み以上に苦労してきた静だったが、夜の仕事は初めてであった。

五年も勤めれば立派なベテランである。

しかし、静は何故かいつまでも初々しいままだった。

「お疲れ様。」

梅崎は短く答えた。

いつものようにソファーに寝そべるように腰掛け、長い足を放り投げていた。

梅崎もどう見ても二十代にしか見えないが実際は三十代半ば。

静にとって五年前に初めて指名を貰ったお客さんであり、一番に仲のよいお客さんだ。

梅崎は謎の多い男、というよりは、秘密主義で通しているらしい。もちろん静は梅崎の職業も年齢もファーストネームも知っている。なかなかこの二人、プライベートでも仲がよろしいようだ。

しかし、梅崎のプライベートや二人の付き合いは、今のところ物語にはあまり関係がないので、彼の秘密主義を尊重しよう。

店内の大画面には、去り行く夏を惜しむかのように、南の島の白い砂浜と透き通るように青い海が映し出されている。

二人はその映像を見るわけでもなく、グラスを傾けながら、楽しげに過ごしているようだ。

梅崎は足を放り投げた姿勢のままくつろいでいる。

静もこれもまた、お店にいるとは思えないようなリラックスした表情でいる。

「今年の夏は海に行けなかったわ。プールに行っただけ。」

「そうか。でもまだ南の国に行けばいつでも夏だよ。」

「そうなんだけどね。私、近頃は季節感を大事にしたいと思っているの。今は夕暮れに夏の終わりを感じているわ。」

「それで月でも見て、秋を感じ始めるのかい？」

「そうそう。」

「随分と風流になったものだ。」

静は笑っている。

梅崎は「本当か」という表情で静を眺めている。

静の視線が動いた。

「来た、来た。」

静は梅崎に話しかけるといふよりは、むしろ独り言のようにつぶやいた。

「あのお客さんのことか。」

梅崎は左手の三つほど向こうのボックス席に視線を流した。

「さやちゃんとお客さんのほうはタカちゃんよ。」

「さやちゃんといえば、マジで惚れてます感を出しまくって、熱く通ってくるお客さんが多いよね。」

「そうなのよ。いろいろとさやちゃんについてはお話があるのよ。」

「どんなお話かな。」

「うん、こんなお話だよ。」

静はゆっくりと、そして少しいたずらっぽく語り始めた。

さやは関西出身の二十四歳。

現在、都内の某一流大学に在学中。

一人暮らし。

彼氏なし、らしい。

約一年ほど前に入店した、清楚なお嬢様系の女の子だ。

実際、旧華族系の令嬢という、筋金入りのお嬢様なのだ。

二年間のフランス留学を経て一度帰国。

しかし今までアルバイトもしたことが無いし、実家からも独立するために、自分で一生懸命働いて、もう一度、大学卒業後フランスに留学したいという、やっぱどこか少しずれている感もあるが、真面目な女の子だった。

ちやうどアルバイトを探して街を歩いているときに、このお店に

スカウトされ、世慣れてないこともあり、なんとなくキャバ嬢を始めてしまった。

もちろん頭脳明晰、容姿端麗、日、英、仏の三ヶ国語を使いこなす、そういう意味では非の打ち所のない才女だ。

一方、お客さんのタカちゃん。

地元の土建屋に勤める三十二歳。

推定、身長一八二センチ、体重一一三キロこちらも推定、縦にも横にも大きい。

夏場はいつもアロはシャツを着ている。

かなりの見栄っ張りで妄想族らしい。

静が待機席で聞いた女の子たちの話をまとめてみると、さやちゃんにマジ惚れで通ってくるお客さんは本当に多いらしい。

その中でも特に熱いお客さんが二人。

その一人がこのタカちゃんだという。

待機席とは、テーブルのない女の子たちが、出番を待つて、待機している場所のことを言う。

お店によって、専用の待機場所のあるお店や、店内のお客さんのいないテーブルを待機席にしているところがある。

話を元に戻そう。

「タカちゃんて、わかる？」

一人の女の子が、隣の女の子に話しかけていた。

「知っているよ。さやちゃんのお客さんでしょ。いつもアロハシャツを着ている、あの体の大きな人でしょう。」

「彼、さやちゃんに給料三か月分の指輪を買ってプロポーズしたらしいよ。」

「マジで。さやちゃんは受け取ったの？」

「彼が言うには、受け取ったらしいよ。もう結婚した気で浮かれていたもの。」

「じゃあ、もう一人の北島さんの話は聞いた？」

「そっちは聞いてないわ。」

北島さんとはさやちゃんにマジ惚れで通ってくるもう一人。
タカちゃんとはライバル関係にある。

もちろん、さやちゃんの気持ちとは関係ない。

「北島さんも、さやちゃんにプロポーズしようと思って、ヘリコプターを予約して横浜ナイトクルーズにさやちゃんを誘ったらしいの。」

「北島さんもヤルわね。」

「だけど、さやちゃんもヤバいと思ったみたいで、断ったらしいわ。さやちゃんもとぼけている割には勘が鋭いのよ。北島さん、フラれたといって泣いていたわ。」

女の子たちの会話はまた別の話題へと移っていった。

「なるほど。」

「梅崎さん、どう思う。」

「二人とも、そんなに熱くなって、大丈夫なのかな。北島さんはまだお店に来ているの？」

「前よりはペースは落ちているけど、それでもたまには見かけるわ。」

「そうか。それよりもさやちゃんが、指輪を受け取ったのが本当ならちよつとした事件ですね。」

「そうよね。私なら受け取れないわ。その場で断っちゃう。」

「大好きな人でも断っちゃうの？」

「大好きな人からのプレゼントなら別よ。」

静の顔がほのかに赤くなっている。

少し酔い始めたのだろうか。

それとも、別の理由なのか。

静は梅崎のほうも微笑みながらもにらんでいる。

梅崎は静の視線に気づかない振りをして話を続けた。

「しかし、タカちゃんも勝負かけたよね。」

「そうね。私が見ている限りじゃさやちゃんのほうには全くその気はなさそうなのに、よく勝負にでたわね。」

「やっぱり、タカちゃんは舞い上がっているのか、それともさやちゃんの色恋なのか。」

梅崎は自問しているようにつぶやいた。

梅崎はさやと何度か話したことがあった。

そのさやの記憶を思い起こしているようだ。

「さやちゃんは違うわ。」

静はきっぱりと言い切った。

梅崎の「さやが色恋」の言葉に反応したらしい。

ここではほんの少し「色恋営業」について説明しておこう。

「色恋営業」とは、お客さんを捉まえる手段として、恋愛関係のお付き合いをすることである。

顧客確保の手段としてなので、もちろん嘘である。

しかし、お客さんには本当のことと信じてもらわなければいけないので、お客さんのほうは本気である。

ちなみに、身体まで与えてしまうのは「枕営業」といい、これをする、お店のほかの女の子から嫌われるらしい。

「確かにさやちゃんのお客さんは、彼女に恋してる人が多いけど、それはさやちゃんがいい子過ぎるからだわ。彼女の雰囲気がそうさせるのよ。」

「鋭いねえ。でもそのいい子すぎるといふのと彼女の雰囲気が問題なんじゃないかな。」

梅崎は静を眺めにやにやしている。

梅崎はにやにやしてはいるが、静が鋭いことにはずっと以前から、好ましく思い、また尊敬に近いような気持ちも持っていた。

静は感性が豊かで、洞察力にもすぐれている。

ようするに、直観力にすぐれているのだ。

「いい子すぎるのが問題？ 雰囲気の問題？」

静はそうつぶやき、何か考えているようだ。

「前にお店の女の子の雰囲気にはタイプがあるとか、無いとか、梅崎さんが話してたような気がするんだけど・・・。」

「話したよ。」

梅崎はそう答えてからタバコを口にくわえた。

静がすぐに火をつける。

梅崎が美味そうに、煙をいっぱいに吸い込んだ。

梅崎の目が鋭くなり、脳内に持つCPUが動き始めたようだ。三つ向こうのテーブルで俯いているさやに目線が向けられた。

静と梅崎は似ているといえば似ている。

また、似ていないといえば似ていない。

似ている点は、二人が考えて出す答えが似ている。

似ていない点は、考える方法、過程は別の手段をとっているようだ。

タイプわけすると、静は直感タイプ。

梅崎は論理派タイプ。

結果が近いので、お互いの考え方、手段の違いも個性として尊重しあい認められる。

だから二人は仲良くやっていけるのであろう。

梅崎の視線はさやを捕らえたまま、語り始めた。

お店で働く女の子にはいくつかのタイプがあるという。

梅崎は大まかに分けて、二×二×二で八タイプに分けている。

話し型、色気あり、明るい。

話し型、色気なし、陰あり。

話し型、色気あり、陰あり。

話し型、色気なし、明るい。

ノリ型、色気あり、明るい。

ノリ型、色気なし、陰あり。

ノリ型、色気あり、陰あり。
ノリ型、色気なし、明るい。

もちろん、あまり存在しない組み合わせもある。

有り無しの微妙な混じりもある。

だが梅崎は大体このように分けて考えているようだ。

「静は普段はノリ型、明るい、まで同じで相手によって色気有り、色気なしの二タイプを使い分けているよね。」

「そうだね。うん、そのとおりだわ。」

「でも、静の本質は、話し型、基本色気なしだけど微妙に有り、明るいけど陰はあり、とオレは見ているね。この明るいけど陰があるところが微妙な色気につながっているんだと思う。」

「さすが。よく見ていらっしやる。」

静は嬉しそうに梅崎を見つめている。

「さやちゃんはどのタイプなのかな？」

静は首を少し傾けて尋ねた。

「さやちゃんは、話し型、健康な色気、明るい、このタイプだね。しかもこの三つの要素のバランス感が絶妙だよ。天性のものだね。」

「わかる、わかる。このタイプって男の人は好きなの？」

「ベストかどうかは個人差があるから別として、男女問わず、このタイプの子を嫌いという人はいないでしょう。」

「うん。それでいて実はこのタイプの女の子はキャバクラには少なかったりして。」

また静は鋭いことを何の気なしにそのかわいい唇から発した。

「静は怖いな。」

でも、梅崎は本当に嬉しそうに静を見つめ、話しを続けた。

「本質このタイプの子はいるのだろうけど、みんなお店ではキャラをある程度は作っているだろうしね。さやちゃんはキャラを作らないというか、作っているつもりでもうまく出来ていないのか。その辺がお嬢様なのかな。」

梅崎はグラスを口に運び喉を潤す。

「そうね。さやちゃんはお嬢様だけど、美人だし、もちろん頭は良くて話題豊富、性格も良い意味でおっとりしていて明るく健康的。これではどんな男でも惚れちゃうね。」

静は一人でうなずきながら納得しているようだ。

「ここでのポイントは、健康的な色気だね。」

「そうなの？」

静はまた小首を傾げる。

静のこのしぐさは、抜群にかわいい。

梅崎は静のこのしぐさに触れるたび、内心ときどきする。

少し慌てたように、梅崎はまたタバコの煙を深く吸い込んだ。

「色気というのは、異性に対するセックスアピールという部分があるでしょう。このセックスアピールが健康的で明るいということはまずセックスの淫靡なイメージを払拭してくれる。第二に『エッチしたいぜえ』と思わせるけど、その気持ちを走らせ過ぎない。色気全開だと気持ちが悪くセックスに走りすぎて、エッチがしたいのか、その相手の子が好きなのか本当のところが見分けづらくなるんだよね。」

「なるほど。ということは、さやちゃんを相手にしたお客さんは、さやちゃんを好きだけどセックスが一番の目的じゃないよ、ってなるのね。」

「そうなんだよ。明るい色気は怖いね。その上、さやちゃんはおっとりしているし、清楚系で嘘もつきそうに無い。お客さんはさやちゃんを信用する。」

「そうやって、一番ハマったお客さんが、タカちゃんと北島さんのね。」

静は納得がいったのか、しきりにうなずいている。

「北島さんが脱落したことをタカちゃんは知っているのかな？」

梅崎は静に尋ねた。

「それはわかつてると思うわ。」

静は自信ありげに答える。

「タカちゃんのほうは、北島さんが脱落して、指輪も受け取ってくれたから有頂天、というところか。」

梅崎は少し考えるようにしながら、もう一度さやの横顔を見つめた。

「あれ！何かヤバそうな雰囲気だよ。」

梅崎の言葉に静もさやのほうを見た。

「本当だ。何かもめてる。何してるのかな？」

梅崎と静はさやとタカちゃんを凝視している。

「あれ、指輪を返してるんじゃないかしら。」

静が梅崎の耳元に顔をよせて囁いた。

梅崎は静の顔がすぐ横にあることに気づき、またときどきした。

どうもこの梅崎と静の二人は妙な感じだ。

変なところで二人ドギマギしたりする。

以前からお互い思うところはあるようなのだが、この二人の関係は二人にしかわからない。

いや、二人にもわからないのかもしれない。

もちろん、筆者もあずかり知らないところだ。

それというのも、筆者はあまり深く突っ込んで考えているわけではないので、そこまで設定してないだけである。

いい加減なものだ。

二人の関係は今後の展開に期待しよう。

閑話休題

話を元に戻そう。

さやとタカちゃん、何かを押し付けあってるようだ。

タカちゃんの左手の薬指にきらりと光るものが……。

まず、静が気づいた。

それとほぼ同時に梅崎も気がついた。

静と梅崎の兩人、一瞬見つめあう。

そして、二人でにやにやはじめた。

「これは、さやちゃんを場内指名で呼んで、本人から直接詳しい話を聴きたいな。呼んでもいいかな？」

梅崎は静に了承を求めた。

「うん、場内しよう。」

静は快く了承した。

梅崎と静はゆったりとグラスを傾けている。

いつの間にかさやとタカちゃんの姿がフロアから消えている。どうやらタカちゃんが帰ったようだ。

例の大画面は、南の島の映像から、イタリア「セリエA」開幕戦の中継に変わっていた。

インテルがリードしているようだ。

相変わらず梅崎と静は、大画面を見ていないようだ。

ゆつくりと、音もなく二人の時間が流れていく。

しばらくして、さやがテーブルにやってきた。

「こんばんは。今日は呼んでくれてありがとう。」

さやがちよつと憂鬱そうな笑顔で梅崎の向かい側に腰を下ろした。
「いえいえ、いらつしゃい。こんなテーブルで申し訳ないけど、ゆつくりしていつてよ。」

梅崎が精一杯の笑顔で答える。

梅崎はよくお店の女の子のような気の使い方をする。

この言葉を聴いて、さやは照れたように笑っている。

静はいつものようにやはり完璧な微笑を、梅崎にもさやにも見せている。

「さやちゃん。何飲む？」

梅崎が尋ねた。

やはり梅崎がホスト役を引き受けているようだ。

静は仕事だということを忘れたように、梅崎に寄りかかり、やはり完璧な微笑を口元に浮かべている。

さやの表情は少し明るくなった。

「今日はお酒の気分じゃないので、ミネ（お水）でいいわ。すみません。」

梅崎は新しいミネラルウォーターをボーイに頼み、さやのレディースグラスに注いだ。

やはり、ここでも梅崎がホスト役を続けている。

静は早く本題を切り出せとばかりに、梅崎を見つめ、梅崎のわき腹をつついている。

「さやちゃん、さっきタカちゃんに何かを押し付けていたようだけど、もしかしてあれは噂の指輪？」

梅崎が頭を掻きながら聞いた。

いつの間にか梅崎はソファアに腰掛けなおし、テーブルの上に身を乗り出している。

隣で静が同じようなカッコでやはりテーブルの上に身を乗り出している。

「その話、知っているんですか？」

梅崎と静は一瞬見つめあい、さやに向かって二人同時にうなずいた。

「給料三か月分の指輪だとか・・・。」

静が興味を隠せないように聞いた。

目をキラキラと輝かせていた。

静はいつの間にかグラスを重ねていたようだ。

静の頬が上気している。

「ちよつとそれはオーバーですよ。実際はもつと安いです。」

さやは苦笑しながら、きれいな顔の前で大きく手を振った。

「なんで、そんなエンゲージリングを受け取ったの？」

静はハテナがいつぱい、好奇心がいつぱいだ。

好奇心に目を輝かせている静もとても魅力的だ。

「一ヶ月半くらい前、同伴した時に私が指輪を眺めていたのがことの始まりだったんです。そうしたらタカちゃんがボーナス出たから

買ってあげるって言うんです。ちょっと高いから、貰っちゃったら重いかないかと思っただけで、その指輪、前からかわいいなと思っ
てて、けっこう欲しくて自分で買おうか悩んでたんですよ。でもそ
のときはそれで終わっただんです。」

さやはそのきれいに澄んだ瞳で目の前にいる二人を交互に見た。

「うんうん、それから。」

静が相槌を打つ。

静の瞳もキラキラと輝いているがやっぱり澄んでいる。

「それから何日かして、タカちゃんが指輪を買ってお店に持ってき
たんです。サイズはこの前私が試しにはめていたのを横で聞いてい
たらしくて、サイズもぴったり。」

さやは苦笑している。

「もう買ってきちゃったし、欲しかった指輪だったし、私も貰つと
けばよいかなって、つい貰っちゃったんです。」

今度は梅崎と静が苦笑する。

さやを見ると、さやも苦笑している。

「ずっと一緒にいようね、とか言って渡されたんだけど、いつもタ
カちゃんはそのなことを言うから、あまり気にせず貰っちゃいまし
た。私、やっぱりちよつとトロいですよね。」

さやの口調はだんだん自嘲的になってきた。

「トロいだなんて、北島さんのときはうまくかわしたじゃない。み
んな、さやちゃんは鋭いって言ってたわよ。」

「実はあの時、本当はすぐ行きたかったんです。でも、どうして
も大学のゼミの関係で行けなくて。だから北島さんの気持ちに気づ
いてかわしたわけじゃないんです。」

さやの答えに三人は笑った。

とてもホンワカした笑いだった。

さやが先を続ける。

「しばらくして、タカちゃんが来たときに気がついたんです。私が
貰ったのと同じ指輪をタカちゃんがしている。それも左手の薬指。」

ペアリングだったのって？そうしたら、タカちゃんが、私の親に挨拶行くとか、タカちゃんの親に会ってほしいとか、結納がどうとか・・・。私、パニくりました。何、何のこと？って。」

さやはここまで一気に話すと、ミネラルウォーターを口にし、喉を潤した。

梅崎と静。今度は笑わずに、二人目を合わせた。
なんという、タカちゃんの暴走、爆走、妄想族。
恋は盲目。

十月になった。

さやは九月いっぱいでお店を辞めた。
留学のめどがついたのだ。

一度、実家に帰り、準備をするらしい。

「今までいっぱいありがとう。」

さやはそのきれいな瞳に涙をいっぱい浮かべて、ひそやかにお店を去っていった。

タカちゃんはというと、ぎりぎりまでさやがお店を辞めることを知らず、あきらめ悪くお店に通ってきたが、さやが辞めると同時にその姿を見かけなくなった。

タカちゃんの夢、さやは幻影まぼろしと消えた。

そう、ここは「クラブ ファントム 幻影」。

すべてがまぼろしの出来事。

色と欲と見栄の世界。

「もう、本当に秋だね。今日の空はどこまでも青く高く澄んでいたわ。」

静がつぶやいた。

梅崎は足を放り投げたままのいつもの姿勢で、ただ静の声を聞い

ている。

「秋は恋の季節というけど、恋って良いことばかりじゃないのね。さやちゃんとタカちゃんを見ていてそう思ったわ。私は冷静かしら・・。」

静は梅崎を見つめた。

視線が出会う。

梅崎の目に戸惑いの色が見えたが、一瞬で消えた。

「静は大丈夫だよ。しっかり季節の移ろいを感じている。静の心は穏やかだよ。」

第二話につづく・・・予定

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0072f/>

「クラブ ファントム」

2010年10月26日05時13分発行